

まきえきょろく
蒔絵曲祿

＜概要＞

員 数	1 基		
法 量	高 78.5cm	幅 (背笠木) 67.1cm	(座 框) 49.4cm (脚) 49.5cm
	奥行 (背板中央～脚前端) 117.3cm		(座) 27.8cm
時 代	桃山時代末～江戸時代初期 (17 世紀前半)		

本作品は、木造で、全体に黒漆を塗り、蒔絵¹を施した交脚式の曲祿²である。背は、緩やかに波打つ笠木を側柱に装架する。中央に長方形の背板を設け、これを下端で横板が受ける。柱は背部分のみ緩やかに反らせて、座より下は直線的に脚端に至る。座の皮は横棧に小孔をあけ、縫い留めた上で鉸留³していたが、現在はすべて欠失しており、孔と 15 個の鉸のみを残している。

本作品には、蒔絵で図像が描かれている。笠木に桐唐草、背板下端の横板には菊・桐紋の組み合わせ、柱には薄に露、座の棧と踏板には海松貝³、脚前棧には葵、後棧には丁子唐草を表す。蒔絵の技法は平蒔絵で、濃さを違えた絵梨地を主体とし、菊紋の一部、葵の花、貝の一部などを針描で表している。

金具は金銅製の桶形八双形で、笠木鼻、座棧鼻、踏板鼻、脚棧鼻と柱の交差部に嵌める。素地に蹴彫りで桐紋を表し、鋤彫りは施していない。

製作時期は、桃山時代末から江戸時代初期 (17 世紀前半) とみられ、滝山寺の近世整備期に施入されたものと思われる。本品と同様の平蒔絵を施した曲祿としては京都市瑞光寺伝来の南蛮人蒔絵曲祿 (重要文化財、桃山時代) が知られるが、類品はきわめて少なく、工芸史的価値が大きい。

1 蒔絵：漆で書いた絵の上に、金銀粉や色粉を蒔いて固め、文様を表現する技法。

2 曲祿：僧侶が法事の際などに用いる椅子のこと。

3 海松貝：松の葉に似た海藻であるミルと様々な貝を合わせた文様のこと。



全体図



踏板（海松貝文様）



金具（柱交差部）

（愛知県教育委員会提供）